



尾瀬の半年

渡辺 伊沙子

この四月、夫の転勤について尾瀬に來ました。それまで山にも多少は登ったりしていましたが、尾瀬だけは割合人にも知られているところだったにもかかわらず行ったことがなく、はじめて行くというのがそこに住むことだったとは、本当におかしなことでした。けれど、以前に行ったことがないというのはいろいろと夢があり、それに楽しいものでした。

入山したのは四月二十五日、町には春の香りが満ちていたのに、三平峠をのぼりつめてみえたのは沼の上に厚くつもった雪とまっ白な懸ヶ岳、それは本当に美しく、思わず大きな声をだしてしまったほどでし

た。五月になると静かだった沼の周辺が、なんとはなくざわざわしてくると、それが「尾瀬」という言葉に呼び出されて來た人びとの、秋までつづくにぎわいのはじまりだったわけです。

なぜ水芭蕉だけを見るためにこれほどまでの人々が群をなしておしかけてくるのか私には不思議でなりません。後からわかったのですが、それは多分に雑誌などの宣伝によるためでしたが……。

水芭蕉が終わると、湿原は本当にきれいになって行きます。小さな小さな花々、可れんで、きゃしゃで、それでいてよくみると、とてもあでやかなのです。タテヤマリンドウ、ヒメシヤクナゲ、イワカガミ等々、つぎからつぎと咲きつづける花をみるのが、毎日の日課になりました。家事の合間にちよつと湿原まで行ってみてる、そんなせいたくなができるとは幸せなことなのだ、ときどき町に出た折りに感じました。

ニコウキスゲが咲く頃になると、夏のシーズンがやって來ました。ここには様々な格好の人びとがやってきました。まあ、登山スタイルが一応ここにくるのには妥当な感じがするのですけれど、なかにはミニスカートにサンダルはいてとかハイヒールとか、町中を散歩するような人もかなりいて

夏中いるアルバイトの学生と結構話題にしておしゃべり、退屈しているときがないくらい様々な出来事で満ちていました。そんなあわただしく、楽しい話題に満ちた夏が終わると、湿原はいつの間にか秋の花、訪れる人も急に減り、ヒソソリとしてしまい、ああ、もうじきに秋がきて紅葉になつてと思ううちに木の葉は散り、湿原は枯れはて、下山の仕度をはじめなければ、などと話す日が多くなり、近くの山小屋の人達とも「いつ山を降りるのですか」というのが挨拶がわりになりました。いまはもう十一月、雪がチラチラ降ったり、山小屋も半分は冬がこいをして下山してしまい、急にひっそりと寂しくなつてしまいました。私達ももう荷物はおおかたおろしてしまい、いまはもう下山の日がきて來年また登ってくるであろうその日まで、ここもしばらくお別れです。

今年ほど変化のあつた楽しい半年は、いまままで経験したことがありませんでした。

大雪山に想う

橋場 文俊

先日、病院の慰安旅行で大雪山に出かけ

た。旭岳の麓にある勇駒別温泉である。日夜、病人に接し、多忙な毎日をおくっている職員諸君に、山の美しさを満喫してもらいたいと考えたからである。

幸い当日は快晴に恵まれ、美しく紅葉した山麓の林の間をぬつて登っていった。こんな素晴らしい天気の良い日にゆつくりと歩いて、周囲を眺めながら登れたらどんなに楽しいだろう。私は、学生時代の山岳部の合宿訓練の頃のことを思い出していた。

宿に荷物を置いてケーブルに乗って、姿見の池まで上った。かつて私たちが登山した旭岳とは、様相が一変しているのに驚いた。姿見の池のそばにある山小屋は荒れはて、高山植物帯の間は歩道が柵を用いてつけられてあつた。

「上に行こう」と職員に声をかけてみたが、若い人たちは尻ごみをして引き返していった。私は一人で登りはじめた。八合目近くまで登った。静寂の中に美しい山がたえずんでいる。かすかに噴煙の硫黄の臭いが、風にはこぼれてきた。

下をみおろすと、開発の名の下に荒れはてた山肌があつた。開発とは一体なんだろう。一つの会社が、自社の利益のために自然が破壊されてよいものだろうか。また、私が上に登ろうといったとき引き返していった若い人たちは、あまり山に興味がな

ったのだらう。そんな人たちを、ケーブルでわざわざ上まであげてゆく必要があったらうか。やはり山は歩いて登るもの、美しい山肌を眺めるものではないのか。

北海道の中央高地で、道内では一番植物种・動物たちが多く、太古の姿をとどめていたこの一帯が、ケーブルが設置されたことにより、あっという間に都市化して自然の姿を変えてしまった。しかも国立公園という、国民が自然にしたいし唯一の地域内のことである。このケーブル設置に許可を与えた役人どもに、私は腹を立てて山を下った。噴出口から噴き出る激しい音が、高く低く風につけて響いてきた。それは、神の怒りの声にもにている。

(喜茂別厚生病院長)

岩手の自然保護運動

松村

雄たけし

生まれ育った北海道から盛岡に移り住んで、三たび東北の紅葉を眺めることになりました。北海道の強いコントラストに彩られた男性的な紅葉美にくらべて、岩手の紅葉は柔らかな色調を帯びた女性的な印象をうけ、秋にも地方色があることを覚りました。

た。

さて、去る九月二十九日、盛岡に県内各地域の自然保護関係団体や山岳団体、自然愛好者が集まって遅ればせながら「岩手県自然保護協会」が創設されました。北海道自然保護協会の場合、自然保護の早急な必要性を先見した知識層が軸になって設立されたと理解しております。地道に積まれた協会の活動実績と蓄積された基礎研究に裏づけされた科学的根拠が、今度の大雪山縦貫道路計画を中止させる原動力となったのだと思います。

岩手県の場合、協会の設立にいたる情況が北海道とだいぶ異なります。岩手県における公害の象徴的な存在は松尾鉱山です。盛岡市街を貫いて流れる北上川の岸に立つと、水に洗われた岸辺の石垣や河原の石の表面が異様に赤さび色をしているのに急ぎます。硫黄採掘で栄えた松尾鉱山は八幡平の山裾に巨大な爪あとを残して四十六年閉山されたのですが、坑道から湧出するpH3の地下水が北上川の水を汚し、飲用はもちろん灌がいにも使えず、魚の居住をも不可能にしてしまいました。いまなお廃坑から地下水が湧出するため、県が多量の石灰を投入してようやく最近、死の川からよみがえりつつあります。この夏盛岡市内でウグイの生息が久しぶりに確認されましたが

石灰投入を止めると再び死の川に帰するのです。過去における鉱山の短い繁栄に比して、残された破壊の傷跡と代価のなんと大きなことでしょうか。

数年前までは開発からとり残された（というより、開発の手をまぬがれてきた）というべきでしょうか。岩手県でしたが、東北新幹線や東北縦貫道路計画が具体化された四十四年前後から、県内で産業開発・観光道路問題が盛んに取沙汰されるようになりました。全国四十五番目の低所得、出稼ぎ者が多く、人口過疎に悩む県行政は、所得アップと出稼ぎ・過疎対策をねらって企業誘致と観光開発に活路を見い出そうとしました。八幡平山頂直下を越えて岩手県と秋田県をつなぐドライブウェイ、八幡平アスピテラインは県内の有料道路の先駆けとして四十五年開通したのですが、高山植物の枯死、高層湿原の枯渇・裸地化が進み、最近とみに山の荒廃が目立っています。しかし、県内各地で無定見な開発計画に反対して組織的な運動が活発になったのは四十六年以後のことです。ニュースで報じられる全国各地の環境破壊や公害問題を見聞きし、目の辺りに八幡平の荒廃ぶりを見せられるに及んで、これまで恵まれた自然環境の中に安住していた南部人が郷土愛に目覚め、ようやく重い腰を上げて立ち上が

ったといえましょう。

三陸海岸では、不振な漁業にかえ大企業を誘致して大工業地帯にするとの唱い文句で、県によって広田湾の埋立開発計画が具体化されましたが、陸前高田市と気仙町の住民が立上り、きれいな海と漁民の生活を守ろうと反対運動を起こしたのでした。そして「広田湾埋立開発に反対する会」をはじめとする住民運動は、県に計画白紙撤回させることに成功したのでした。ハヤチネウスニキノウやナンブトラノオで有名な早池峰山ではブナ原生林の皆伐作業が進められましたが、「早池峰の自然を守る会」の反対運動によって計画が縮小され、海拔九〇〇m以上の森林に禁伐地域を設定させることができました。しかし、最近また観光道路の可能性を秘めた林道の拡張計画や、特別天然記念林に隣接する駐車場の整備計画が持ち上がっております。

岩手山と八幡平を結ぶ山岳地帯の、いわゆる裏岩手では、奥地開発産業道路と称する観光道路の建設が国立公園特別地域内を通って進められようとしていましたが、「裏岩手の自然を守る会」を中心とした反対運動によって、現在工事が中止されています。以上のほか、いくつかの団体の活動があり、さらに新たな組織化の動きも聞かれます。

しかし、各地域で各々の問題に独自の立場からとり組んできた各団体は、大きな行政力に対する自分たちの力の限界を痛感しまた改めて自然保護運動の意義と必要性を学んで、より大きな広がりとして結束を求めたのです。そして今回の岩手県自然保護協会の結成を見たのです。

松尾鉱山の教訓を生かすこともできず、「日本列島改造論」に躍らされてまた新たな開発計画や誘致運動をくり返す地方行政を見ていると、繁栄の空夢を見る貧乏累のあがきとしか映らないのです。私にとって岩手県は第二の故郷になろうとしています。が、ふるさとの豊かな自然と青い空を守るも滅ぼすも、岩手県人の未来を見通す洞察力にかかっているのです。

誕生したばかりの岩手県自然保護協会のお力は弱く、北海道自然保護協会の方々の力を借りなければならぬ事態があるでしょう。私も理事の末席に引つ張り出されて感ったのですが、そんなときのパイプ役としてなら役に立つことがあるかも知れないと思うのです。そのときは、よろしくお願ひします。

(森林省東北農試)

秋に思う

相場 幸子

ついこの間まで、色とりどりに燃えていた木々も、山の頂上から順々に枯木色一色に染まり、わずかに残照のように映えていたカラマツ林の黄金も、はやその輝きを失った。定鉄沿線の秋はすでに終わり、あとは来たるべきものを待つだけのこのごろである。

その昔、ハイキングの行先とのみ思っていたこと藤野に住んで八年、子供を小鳥の村で有名な小学校に通わせ、自然保護協会の名簿に名を連ねているといえ、いっばしの自然愛好家に聞こえようが、事実はどうして甚だお粗末で、会員と名乗るのも恥かしい暮らしでしかない。「思う存分野山を歩きたい」と毎年思いつつ、生まれたばかりの子供とか、生まれる予定の子供とか、家族の病氣、主人や私のスケジュールとさまざまな条件に阻まれて、わずかに数回の散歩が実現したきり。末っ子が三才過ぎた今年こそと張り切ってはみたが、五人分の弁当を作ってお尻の重い主人をせき立てて、と考えるだけでエネルギーの大半を消

耗し、せめて隣りの自然公園にやっと引張出せば、全員ゲームコーナーに釘づけというていたらくである。それに車などというものがあると(この不便な土地で、主婦が時たま仕事に出るとなると、車は必需品に近いのだが)、つい山歩きより手軽なドライブでお茶を濁したくなるのが人情というもの。また、冬鳥をわが家の庭にと八年越しの夢を抱きながら、今年も餌台は作れそうにない。自分の心がけが悪いせいにかがいないが、とにかく自然を愛するという仕事には(保護と名がつけばなおさら)、それ相当の寛裕とエネルギーを(場合によってはお金も)つきこまねばならないのだとつくづく思い知らされる。

た。いずれは、ここもブルで整地されるだろう。今年の夏から秋にかけて蛙の合唱も、赤とんぼも秋草にすだく虫の音も、驚くほど少なくなった。ましてや数年前に螢が見られたという話など、いまは伝説以外の何ものでもない。

野鳥といえ、今年のはじめに珍しくたくさんの鳥がこの団地を訪れ、キレンジャクの大群が電線にとまったりした。しかしその理由は近くの林が伐られたせいと聞いている、喜んでばかりもいられない。たしかにすぐ近くの小山が一つ、てっぺんまで丸坊主にされた。ブルドーザーで、何もかも削りとった土色の丸坊主である。例の、市街化調整区域を整理して果樹園と称して売

りまくった悪名高い業者の仕業らしいが、こんなことの許されるいまの世の中の仕組が、なんとも腹立たしくも不可解である。国道沿いの丘も、無残に木々が伐り倒され

た。一方、自然と対決する方は一見、自然破壊のように見えるが、ぎりぎりの必要に迫られてのことで、一旦生存が保証されればそれ以上の無益な破壊にはつながらない。「開拓」にはそういう厳しさがあつた。レ

ジャーや金もうけのための「開発」とはわけがちがう。ところが最近、そんな開発業者たちが真先に自然保護をうたい文句にしているのだから恐れ入る。狼と羊ではないが、そういうニセの自然保護を真の自然保護から見分ける目を養わないと、「自然保護ムード」に酔わされて破壊に手を貸すという事にもなりかねないのではないだろうか？

藤野の秋の美しさを書くつもりだったのに、なんとも殺風景な文になってしまった。怠け者の会員が、偉そうな口をきいてとお叱りを受けなければ幸いである。

(主婦)

東京でおもうこと

渡辺 伊津子

東京ってほんとうに人がたくさんいてそれがみんなセカセカセカ歩いていて、私なんかウロチョロしているときとばさされてしまいます。狭い日本、そんなに急いでどこへ行く、って言いますよ。

東京の地下鉄って、どうしてあんなケタタマシイ音を立てなきゃ走れないんです。私はいつも耳をおさえて乗っています。

東京の空はいつもドンヨリきたなく、強

い風が吹き雨が降った次の日でないとき空は見られませんが、東京に住んで以来、いつものヒリヒリ痛みます。東京の緑は、とつてもショボクして、元気がなく見えません。植物園の枝を大きく広げたニレの緑がなつかしいです。

東京の夏はどうしてああ気違いじみて暑いんでしょう。東京の夏は北海道で生まれ育った私には耐え難く、もともと大して持ち合わせのない私の思考力を、ますます低下させます。

東京の子供はなぜあんなにコマッシャクして、コナマイキなんでしょう。子供つてもっと可愛げというものがあるかと思

います。東京は地震が多く、しょっちゅうグラグラゆれています。チマタには近々大地震が起こりそうなウワサが流れています。私の住んでいるアパートの周辺も家が混んでいますから、一たびグラツと大きいのがきて火事にでもなれば、まず命はないでしょうね。

東京のこのアパートには、それはそれは大きなゴキブリがいつぱい住んでいます。私は深夜、お手洗いに起きてゴキブリにバツタリでつくわすたび気絶しそうになります。ああ、東京は……。東京は……。

札幌から東京に移り住んで一年余。見る

もの聞くものすべて北海道と比較して、東京に住んでよかったなんて思うことひとつもありません。北海道に帰りたいと帰って、新聞に北海道のことが一行でも載ってれば飛びつくし、テレビが一言札幌でも言おうものなら胸がドキドキする始末です。

私は、私のダンナ様の仕事の関係で東京にいます。ダンナ様も、東京みたいなのに長く住む気はないと言います。けれど多分、もう北海道へ戻ることはないだろうとも言います。私はどうしても北海道へ帰りたいのです。北海道で死ぬのだと頑張っています。多分もう北海道へ行くことのないダンナ様と、どうしても北海道で死にたい私。方法はひとつしかありません。五カ月になる娘を私がひきとって離婚しようと言いましたら、彼はやむをえないから受けて立つと言いました。離婚の多い昨今ですが、近々、また一組の離婚が成立することになると思います。(主婦)

エトロフ随想

国松 登

田中首相の訪ソで期待されていた北方領土の返還問題も、またしばらく遠退いたと

いう感じがある。

終戦時の一カ月(正しくは昭和二十年七月十六日から八月十六日)、私たち(三名の画家)は千島島のエトロフ島を中心に、島の日本軍部隊を訪ね歩いてきた。部隊といつても島内の海岸地帯に駐屯していた砲部隊(船舶隊)や野戦の衛生隊、糧秣班、通信隊などを点々と歩いてきたから、日本海岸の砂浜や太平洋岸の切り立った断崖の入り組んだ湾の小さな漁村などをめぐり、美しい北方の島の風景を探勝することができ、いまでもあの美しい島の情景を想い浮かべることのできるほど、はつきりと私の心に焼きついている。

予定の仕事がない日はよく砂浜を散歩した、紅淡の玫瑰(はまなす)が咲き乱れる砂丘が起伏をつくり、海岸の砂の上には波に洗われ、太陽に晒された土器のかげらが散らばっていた。

手にとつて見ると、素朴な紋様が美しく残っている。砂浜のところどころにアイヌ人らしい炉の跡や貝塚など(北海道の古蹟などでよく見かける)が地上現わに、まるで昨日まで誰かが住んでいたような鮮やかさで残っていた。雨の降った翌日は土砂の崩れた丘に石器や鏃(やじり)が光り、私たちは特に小さな色の美しいものを選んで、帰道したらカプス鉤やネクタイピンでも作

ろうかなどと話し合ったりした。それは緑色や朱色などの美しい石、俗に十勝石と呼ばれる黒隴石などの鏝が沢山露出していて私たちを大いにたのませてくれた。

あるときは、船でこの島をひとめぐりした。太平洋の切り立った崖の頂きには盆栽のような形のよい松が並び、ところどころに高い崖の上から滝が落ち、海上から眺めるとこの滝は見事である。岩かげの小さな湾の中に小舟を浮かべると、舟影が海底に映るほど水はよく澄んでいた。

私たちは八月十七日の夜陰にこの島を離れたが、翌日の午後後島沿岸の沿岸を通過しながら、先日噴火した爺々岳を望みながら戦争が終わったなら北海道から遊覧船を仕立ててこれらの島めぐりをしたらたのしいだろうなどと、平和な夢を描いて翌早朝根室港に着いたが、根室市街は終戦間ぎわの空襲で焼土と化していた。

私たちは北方領土返還「島よ還れ」の声を高らかにしているが、もし島が還った暁、現在の日本の経済界、産業界の狂気ぶりを考えたと、この島の運命がいかにみじめに想われてならない。ソ連軍が進駐してからの島の様相は知る由もないが、あの日の川には鮭や鱒が群をなして登ってくるのが橋の上から眺められた。

私は、あえて提言したい。島の還る日は

まず優先的に戦前の島民を復帰させ、少なくとも十年くらいは国が学術調査班を派遣して、未開発の地質や自然などの調査をじゅうぶんにこなしてほしいと思う。考古学的にも何かの資料が得られるのではないかと、私どものような素人にも考えられるからである。

現在のような日本列島改造論の大型開発が進めば、島にはたちまちコンクリートの埠頭や冷蔵庫、加工場などが集中し、河川や海は列島並みの汚染に見舞われることはあきらかであろう。戦後の魔手の伸びていないこれらの島々の自然こそ、いまからこれまでの資料を元じゅうぶんな研究を重ねて保護する義務があるのではないかと痛感するものである。(全道展会員)

道東の晩秋

荒 沢 勝太郎

空は碧く深く、大気は清澄、陽は輝いてさわやかに風は流れる。そこには調和のとれた旋律がある。

道東の秋はまさに爽涼、凋落という感じではなく、明日への生命力をひそかに蓄積しながら、清新さを失わない。それは厳粛な季節の推移を刻みこんでいくが、幻想性

をともなつて豊かである。

サワギキョウ、エゾリンドウ、エゾトリカブトなどの碧紫色の花の群。クサレダマやハンゴンソウ、オミナエシ、アキノキリンソウなどの黄色い花の群。そして帰化植物のアラゲハンゴンソウなどの朱黄色。これらに混ってヤマハハコ白い群落。白といえ、ノリウツギの大きな装飾花が、着飾った田舎娘の祭りの日のように映いてみせるが、やがて灰白色に老いていく。

ヤナギランにつづいてハンゴンソウやアキノキリンソウなどが白い絮毛になり、秋の風に乗って、どこへ新しい種子を落とそうかと、風船旅行に飛び立っていく。

海岸砂丘草原ではヒメイズイの大豆のような青い果実が、黒く熟し、スズランの球形の果実が朱色に熟し、これらは新しい日のための営みをひそやかにつづけて、倦むことはない。

ひときわ目につくのは、ハマナスの真紅の実である。真紅の豪華な花の面影をしのばせるには、じゅうぶん過ぎる演技である。そこには満ち足りた歓びが充満して、一段とつややかである。

ガンコウランの黒、コケモモの赤。これらの小さな木の実も、最近、めっきり減ってきたが、ぎりぎりの限界まで破壊された悲しみが海岸砂丘草原に暗い海霧のように

たちこめている。しかし、海岸の砂採取禁止の措置などで、かろうじてくいとめられて耐えているのには、心を痛める。

釧路湿原のキタヨシの琥珀色が、日一日と濃くなる。それ自体が魂をもっていて、詩的なイマージュを豊かに表現しているような錯覚さえ感じられる。

水辺の花たちも、水中の妖精たちも、おどろな姿を人目にさらすこともなく、自ら忽然と消え、黄濁した水面には緑の葉を浮かべて、悲歌を口ずさんでいる。

ミズゴケの丘塊で、喚声をあげてざわめいていたヒメシヤクナゲ、ツルコケモモ、モウセンゴケ、トキソウ、ホロムイツツジ、エゾイソツツジなど、そしてクシロハナシノブ。これらは静かな世界へかくれる準備のすべてを終えてしまった。やがて長い沈黙の時間に、すっぱりと包まれてしまう。

その頃、ダンチョウが姿を見せはじめる。湿原の生物の頂点であるダンチョウの甲高い声が遠くから聞こえる。季節の告示のようである。

つづいてオオハクチョウの渡りがある。サハリンのアニワ湾でひと休みして、オホーツク海沿岸を南下して道東の湖沼に翼を休める。優雅な白い姿のような集団は、摩周湖の上空を直線に南面に飛翔していく。パスポートを持たない渡り鳥たちは、気

ままな聖地巡礼のようにやってくる。道東の湿原や湖沼が、いつまで彼女たちの聖地であることができるだろうか。そのような危惧の影が、ふっと浮かぶことがある。

雌阿寒岳の噴煙が北へなびく。雌阿寒岳のドームが鮮明に空を区切る。摩周カムイヌプリ摺鉢状の火口壁の白灰色はいよいよ祈禱者の表情を深くする。斜里岳の溪流をヤマモミジの紅葉がもまれて流れてよどみにたまる。知床の山々には冠雪をみる。

これらの山裾のカラマツ林の鮮黄色と広葉樹の紅葉黄葉は、深い自信と愛情に燃えている。それは山々の稜形ではなく、祝福のためのかがり火となるのだ。

これらの祝福の火が消える頃、常緑の針葉樹の原生林は重厚な啓示を与え、湖沼には沈黙の世界がやってくる。すべてのものが凍結の中で受難の苦しみに堪える季節を迎える。しかし、北方の思念は消滅することはない。

(釧路市議会事務局長)

苫小牧東部工業 基地開発によせて

山田 明人

初秋の、ある土曜日の午後、兵庫県庁前の旧友が札幌出張の帰路、立ち寄ってく

れた。じつに二十年ぶりの再会であり、道は初めてのことなので、空港ターミナルまでバスを降り立った彼を出迎えた。

二十年の才月の流れをその風貌から感じた私は、思わず「随分変わったねエ」と挨拶代りに呟いてしまったが、「君は学生時代の面影がそのまま残っているねえ……」などと言葉を返されて、苦勞と働きの足りなさを思い知らされたものであるが、恵まれた環境の中で新鮮な牛乳をふんだんに飲んで生活していると、年をとらないことなど私の曾祖母が百七才まで在世したことなど例にとりながら、一生懸命PRして、その場を逃れたところである。

ところで待望の北海道に来て、札幌での二日間の会議中、ふと東京辺りに滞在している錯覚にとらわれたといい、また札幌から三十六号国道を千歳に向うバスの路筋では、山を削り谷を埋めて工場や住宅が立ち並んでいる様子など、東海道沿線を走っている思いであったという。多分に満たされない感じのまま空港で出会ったのではないかと想像されるのであるが、私の車に同乗願って三十六号線を苫小牧に向って南下、途中火山灰土壌、火山礫の路辺や、ほんの二、三mしか生育していない樺木の山野を垣間見ながら美々の坂を下ったところで左の側路へと曲って十数分、大小さまざまな

牧場の点在する早來町遠浅の酪農地帯へ差しかかったとたんに、「ヤァノ」とか「ホウノ」などと歓声をあげながら窓越しの風物を楽しんで居た。「やっぱり時間をさいて君のところへ来て見て良かった。……はじめて北海道へ来た実感が味わえた。……命が洗われた感じがする。……それにしても大きな生産規模と生産力が頼もしい」などと感心ばかりしている様子が面映いばかりであった。

人の見返らない火山灰の痩せ地を切り開いて豊かな沢野、高い生産力を誇る酪農を築き上げるのに、祖父の代から三代、五十年近い苦しい才月を費していること、良い牛乳を生産するためには乳牛が健康でなければならぬこと、そのためには良い空気と良い水と、良い土壌からできた良い草を充分食べさせる必要があることなど、この仕事一朝一夕で成し得ないものであることを説明した。

前置きが長過ぎたようであるが、ここで私はこの友人の二、三の短い話の中から改めて早來町の自然保護、環境保全運動のチェックポイントを示された思いがしたものである。折りから苫小牧東部工業基地のマスタープランを実施計画に載せるに当たって、苫小牧市が独自案を立てて住民のコンセンサスを得るべく地区懇談会を開き、引

きつづき同市議会でも審議中であるが、私達隣接の早來町に住居を持ち、生業を営む者として、その成り行きを注意深く見守っているところである。苫小牧周辺の先人達が悪条件と闘いつつ築き上げて来た豊かな自然環境と、堅い生産基盤は、今日までじつに長い間かかって積み上げて来たものであり、一方的な巨大開発の陰で乱され砕かれるようなことのないように意志の結集を図るべく、私達の早來町自然保護協会は昨年発足した。

そして苫小牧東部大規模工業基地開発をめぐる早來町シンポジウムを持ち、早い機会に住民の意向をまとめ、環境庁長官、開発庁、北海道知事外関連機関へ『基地北部の柏原地区(一千ヘクタール)は完全緑地として残し、懸念される公害は基地内で吸収処理できるよう、その生産規模を縮小すること、周辺地域の保全、調和のとれた地域開発がなされるように』申し入れ、意見書提出など行なったのである。

本年は独自のプランで環境の現状を私どもの手で調査し基礎的なデータを整えるというところで、各処の水質検査、赤外線カメラ写真による大気汚染度調査、この地域に生息している鳥の羽毛の分析検査による汚染度調査など、道衛生試験場の指導と協力のもとに進め、またエゾムラサキの群落調

査などにより貴重な資料を手元に準備することができた。これらの調査は、これから先、毎年一〜二回つづけて行くことにしている。

前記の友人がいみじくも語ったように、札幌近辺でここが北海道であると、ほっと一息入れさせるものがなくなつたとすれば私達の早来町の酪農地帯は道央地区では数限られた人間生活のオアシスたり得るし、一方また最近の世界の食糧事情を考慮するとき、人間は段々と蛋白質資源を多く摂取するようになっているのであるが、日本では特にその傾向が強いといわれている。やがて必ずおとずれるであろう食糧不足の時代に備えて、高位生産の蛋白質生産地域、中でも北海道の著名な酪農地帯は、人々の心身の命綱として工業開発の荒波から絶対守らなければならないのではないかと思う。

一九七三、一一（早来町自然保護協会）

環状通りの

道路新設について

早川 さかゑ

夏も過ぎ、環状通り建設予定地にかかる住民や墓石が立ち退きました。いままで奥深い印象を与えていた円山の原生林が急に

あらわになりました。私はこれはいけないと思ひ、付近の母親に呼びかけました。発起人三人で子供達のために円山母親連絡会をつくり、付近の住民の署名を集めました。

環状通りの道路新設工事は、いま着々と進められています。円山地区に住む子供がかかえた私どもは、深刻にならざるをえません。このあたり一帯は都心部でありながら円山公園を控え、住民は安らぎを得るのに恵まれた環境でした。ここに道路が建設されるといふ計画は何年前に作られたものであれ、許すことはできないのです。

本当にこの道路は必要なのでしょう。いままでの道路造りは、都心から何kmのところにも環状線を走らせれば車がスムーズに流れるという、車本位のものでしかありません。たとえ環状通りが完成したとしても、琴似街道の車の量が減ると思われません。一分間に一台の割合で車が製造されている今日、このままでいくといくら道路を増やしても焼け石に水です。

土は子供にとつて「かかげがえのない」遊び場であると同時に、遊び道具です。毎年の夏は朝聞こえたカッコウ鳥もどこかへ行ってしまつて、私達を楽しませてくれません。トンボも少なくなりました。生物も住み辛くなつてきているのです。

円山の原生林は大雪と同様、将来に残すべき大切な遺産です。全国的に有名な北大のポプラは老木化していますが、龍興寺の横にあるポプラは青々と茂っています。その木々がかわいそうです。切り倒してしまつては、もったいないのです。

私も母親は子供の未来を考えると、なんともいえない不安に襲われるのです。まだ遅くないのです。土である以上はコンクリートで固められてしまつたら最後です。自然の破壊の速度を、ささやかながらストップさせることができればと思ひ、立ちあがりました。

この環状線建設を白紙にして、子供の広場として開放していただくよう陳情にご協力お願い申しあげます。

「子供達のために」円山母親連絡会

発起人 早川 さかゑ

金 上 由 紀

鈴 木 初 恵

札幌市中央区南二条西二十八丁目

TEL 六四一—三六三八

という文章を持つて一戸一戸廻りました。

十一月二日に八十八人の署名を添えて市議会に陳情し、十九日の建設委員会で主旨説明を行いました。議員団が一度現地を視察する必要があるということで、その日は継続審議となりました。

一方、今田敬一先生と連絡をとり、緑化懇話会に働きかけていただくようお願いし、二十七日の議題にとりあげていただきました。主体はあくまでも円山母親連絡会がなつて、懇話会は協力していきますという返事をいただきました。その後、懇話会の小関先生から、都会の中に円山のような原生林が残っているのは、日本だけでなく、世界的にも貴重なものなので、誇りをもつておし進めていって下さいとの励ましの言葉をいただきました。

また、横路英雄先生とも連絡をとり、日本科学者会議にもとりあげていただくようお願いしてあります。

十二月四日、議員団が現地を視察し、その日の建設委員会でも継続審議となりました。円山母親連絡会は、現在五八〇名の署名を集め、札幌市民全体に輪が広がればと働きかけております。（円山母親連絡会）